

今年も、この世の終わり、終末を語る聖書のみことばを聴く時期になりました。教会の典礼の暦は、来週の王であるキリストの主日をもって、2015年のこの一年を締めくくり、待降節の第一主日をもって、新しい2016年の歩みを始めます。一般の暦の年末年始とは異なる、教会の典礼暦のこの暦の区切り方は、意図的にそうなっているのではないにしても、意味のあることではないかと思えます。一般の暦よりも一月以上早く一年の締めくくりが来て、日常の生活に忙しいこの時期に、世の終わり、終末についての聖書のことばに耳を傾けるといことは、「その日、その時は誰も知らない」「その日は盗人のように来る」(一テサロニケ 5・4)と言われている、わたしたちがやがては迎える終末について、思いを馳せるのにふさわしいと思われるからです。同時に、クリスマスにわたしたちのもとに来てくださった、主イエスをお迎えする準備の待降節が、わたしたちの一年の日常の営みのただ中で始まるということも、わたしたちの日常の生活が作り出すこの世界の中に、神のみ子をお迎えするクリスマスの祝いにふさわしいと思われます。

教会の典礼暦は、他の暦と同様に暦である以上は、この地球上に生を営むわたしたちの生活と人生の上に、太陽と月の運行に従って、時の流れの区切りを記します。このような暦による時の流れの区切りが、わたしたちにとって重要なのは、わたしたちに時の流れをことさらに意識させることにあります。そのような時の区切りにあたって、わたしたちは過ぎ去った時の流れの中の自分たちの生活を振り返り、新たに迎える時に向かって、思いを引き締めます。けれども、教会の典礼暦による時の区切りがわたしたちに呼びかけていることは、そのような時の流れの中での区切りそのものに心を向けるということだけではありません。

教会の典礼暦の年の区切りごとに、聖書の終末を語るみことばに耳を傾けるのは、このわたしたちの世界とその中に生きるわたしたち一人ひとりの人生の上を流れる時の流れが、いつかは終わりを迎えるということにわたしたちの心を向けるためです。

聖書が語る終末の出来事においては、この世のすべてのものを揺り動かす、天地を包む大いなる衝撃が語られています。この聖書が語る終末の予告は、今のわたしたちのありようを根本的に揺り動かすために語られているとも受け取ることが出来ます。終末の恐ろしい出来事を語る聖書のことばが福音として読まれる理由はここにあります。時の流れのままに生きるわたしたちのありよ

うを揺り動かす終末を語る福音の衝撃は、時の流れの中にある、限りあるわたしたちの生のありようにわたしたちを真実目覚めさせ、残された時の恵みにわたしたちの目を向けさせるはずだからです。

けれども、聖書が語る終末の福音は、その恐ろしい内容をもって、この世の時を生きるわたしたちのありようを揺り動かし、わたしたちに真の目覚めを促すだけではありません。今日わたしたちが聴いた福音は、終末の出来事の彼方に、天の雲に乗って来られる人の子の姿を指し示しています。ここにこそ、終末の出来事を語る聖書のことばが、わたしたちにとって福音である真の理由があります。

「その時、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると」という今日の福音のみことばは、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」と再三に渡ってご自分の十字架の死と復活を予告するイエスのみことばを思い出させます。終末の出来事の彼方に、力と栄光を帯びて天の雲に乗って来られる人の子は、この世の生を生きる人の子らのために、自ら人の子の一員となってこの世に来られたお方です。この世の生の苦しみにあえぐ人の子らのために、自らも人の子の苦しみのすべてを背負って、十字架の上にいるのをささげてくださいましたお方です。その苦しみの極致である十字架の死を引き受けることによって、十字架の苦しみと死の闇を切り開いて、人の子として復活のいのちのうちに立つお方です。わたしたちが信仰において待ち望んでいるのは、苦しみに満ちたこの世の終末の彼方に、わたしたちのもとに再び来てくださる、力と栄光を帯びた、復活の主イエス・キリストです。この人の子、復活の主イエス・キリストがわたしたちの世界に来てくださることによって、ついには終末の大いなる破局に至らざるをえない、わたしたちのこの世の営みのすべての苦しみの真の終わりの安らぎを得、力と栄光を帯びて来られる人の子の復活の栄光の輝きに包まれるのです。

「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを人々は見ると」とのみことばは、更に、「その時、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」と続いています。彼、すなわち天の雲に乗ってくる人の子に選ばれた人たちということばがわたしたちを不安に陥れるかもしれません。ここでも、人の子の十字架の死と復活を告げるイエスのみことばを思い起こしたいと思います。

「わたしの後に従いたい者は自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」。主イエスの呼びかけに応え、主がわたしたちのためにしてくださいましたように、父なる神によって与え

られた十字架を、主イエスとともに人々のために担って生きる者たちを、栄光の人の子として来られる主イエスが、その選びから漏らすようなことは決してなさらないと希望し続けたいと思います。

「天地は滅びるが、わたしのことばは決して滅びない」。時の流れの中で、その時々、わたしたちの心を幸せな思いで満たした、あらゆるものは過ぎ去り、先行きはますます暗く思える、そのような状況を生きるわたしたちにとって、終末の予感には現実味を帯びて感じられるかもしれませぬ。しかし、終末を語る聖書のみことばは、そのようなわたしたちの予感の中にある終末の出来事を前提とした上で、その先に起こることにわたしたちの目を向けさせることに主眼を置いています。あらゆる破局を超えて、その彼方にわたしたちを呼び集めてくださる、栄光の雲に包まれて来られる人の子、復活の主イエスにわたしたちの目を向けさせているのです。「天地は滅びるが、わたしのことばは決して滅びない」。あらゆるものの滅びの予感の中で、このように言うてくださるお方への信仰から決して離れない。わたしたちにとって、聖書が語る終末の信仰を生きるとはそのようなことです。あらゆるものが滅びへと向かう時の流れの中にあつて、今日のみことばに照らされて、いよいよ切迫したものとして、わたしたちのこの信仰を真剣に生きて行きたいと思ひます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高